

中国語並置文における意味表示と機能範疇の役割

張，晨迪

<https://hdl.handle.net/2324/1866237>

出版情報：Kyushu University, 2017, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

(様式 3)

氏 名 : 張 晨 迪

論 文 名 : 中国語並置文における意味表示と機能範疇の役割

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

生成文法では、構造が構築されることによって、音（語順）とそれに対応する意味とが決定されると考えられている。これは、文法の知識というものは、基本的に、語彙の知識とその組み合わせ方の知識から成っているという考え方であり、著者もその考え方賛同している。

ただし、実際に文の意味を観察すると、必ずしも、表面にあらわれている語の意味を集めたものが文の意味になっているわけではない。たとえば、その典型例が並置文である。中国語では、2つの節を何の接続詞も用いずに単に並置した構文が頻繁に用いられるが、接続詞がなくとも、この前件と後件の意味の関係は密接であり、片方だけでは文として成り立たない。したがって、2つの節を構造的につなぐ、（音のない）機能範疇を想定した分析が望ましい。

問題は、その機能範疇が文全体の意味解釈に対して、どのような働きを持っていると考えるべきかということである。従来の生成文法の研究では、ともすれば、1つの解釈だけを取り上げて論じているため、この点は特に問題視されてこなかった。しかし、あらためて、きめ細かく観察していくと、同じ構文と言われているものでも、意味解釈には何種類もの可能性があることがよくある。それぞれの解釈ごとに機能範疇を対応させるとすると、1つの構文に何種類もの機能範疇を関わらせることにもなりかねない。まさに、理論と記述の緊張関係の問題がここで生じる。

この問題を解決するためには、文の意味というものを、(i) 構造構築によって決定される部分と、(ii) それに基づいて推論によって補完する部分とに分けてとらえるというアプローチが有用である。本博士論文では、機能範疇の存在によって並置文の前件と後件の意味の関係を明らかにしつつ、推論によって補完可能な部分は最大限に利用することによって、仮定しなければならない機能範疇の種類を最小限に押さえることに成功した。

第2章では、中国語の比較相関構文について考察した。これは、前件におけるある要素の度合いが増すにつれて、後件における要素の度合いも増すことを示す構文である。英語の「the more...the more...」構文の more に該当する要素「越 (yue)」が前件と後件に1つずつあらわれ、「リンゴがより甘くなる、よりおいしくなる」というような文を構成することで比較相関の解

釈を表す。本章では、この構文に関して、従来知られていなかった、さまざまな観察を提示した上で、それらを説明する統語分析を述べた。ここで用いられている機能範疇は、前件と後件それぞれで、越 (yue) が係る要素を取り立て、その意味計算を行うものである。

第3章では、前件と後件にそれぞれ（「誰」「何」などの）wh 語が生起し、後件の wh 語がまるで代名詞のような解釈を持つとされる構文（WH 連動読み構文）について考察した。従来の研究では、WH 連動読み構文が全称量化（universal quantification）的な解釈を持つという観察に基づいて、全称量化子の働きを持つ機能範疇を仮定することが多かった。これに対して本論文では、WH 連動読み構文のさまざまな実例を観察し、この構文には存在量化的な解釈の場合もあり、さらに、そのどちらの解釈になるかは、必ずしも統語的に決定できないということを指摘した。そこで、本論文では、WH 連動読み構文における機能範疇は、「A=B」（A は前件の wh 語が指すもの、B は後件の wh 語が指すもの）という意味表示を作る働きを持つものであり、それに伴って全称量化が起こるか存在量化が起こるかは、推論操作の結果で決まるという分析を提案した。

第4章では、前件と後件にそれぞれ「数量表現」が含まれ、後件の「数量表現」がまるで代名詞のような解釈を持つように見える構文について考察した。特定の例文だけを見れば、これは、第3章の WH 連動読み構文と似て見えるが、さまざまな例文を観察した結果、この構文と WH 連動読み構文は、多くの点で異なっており、この構文で用いられている機能範疇は、単に前件と後件の「関連性」を要求するだけのものであることを主張した。前件と後件が関連づけられれば十分であるため、「張三が舞い、李四が歌う」のような対句にもなる一方、動詞や目的語の形式が一定の条件を満たした場合には、前件と後件の関係を打ち立てるために、さらなる工夫が必要になる場合もあり、その結果、全称量化が引き起こされたり、「数量表現」が代名詞的な解釈をされたりすることがあるだけなのである。

第5章では、本論文の提案をまとめ、提案してきた3種類の機能範疇について、考察を述べた。

人間は、言語からものを理解する際に、言語によって表されている情報に加え、推論や世界知識を援用して情報を補っている。つまり、人間が理解する意味全体が構造構築によって決定されなければならないと考える必要はないのである。本論文では、推論によって理解可能な部分を最大限に切り離すことによって、構造構築によって決定される意味の部分を限定し、統語分析がなるべく簡明になるようにした。結果的に、1つの構文につき複数の機能範疇を仮定することを避けることができ、その機能範疇によって、それぞれの構文の本質をとらえることができた。このような機能範疇の活躍は、中国語という言語のシステムの特徴を反映するものである。